

日本の漆を、世界の漆へ。若き職人の挑戦を追う

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりを挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)・アート・プロデューサー(下川一哉氏)と匠研究所(ら)をサポーターメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスキャリヤー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポーターメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。



1月24日、プレゼンテーションにて

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー。関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。



作品プレゼンする青柳さん

また当日は、2019年の新たな取り組みとして全国の匠と、世界的クリエイター(コラポレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラポレーションプログラムを発表。コラポレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOAKA)クリエイティブディレクター、森永邦彦氏(KREBALAGE)代表取締役社長、デザイナー、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラポ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

伝統工芸の継承と発展を担う

漆生産量日本一を誇る岩手県。青柳さんは、伝統工芸品として知られる秀衡塗(ひでひらぬり)の工房「丸三漆器」(一関市)で塗師を務める職人だ。秀衡塗とは平安時代に奥州平泉で黄金文化を築いた藤原氏の第3代当主・秀衡が京の都より職人を招き、この地方産の漆と金を使った器を造らせたのが起源とされている。青柳さんは、大阪の大学を卒業後、いず



展示している「FUDAN」シリーズの器

れは家業を継ぐ意志を持ちながらオフィス・物流関係の消耗品を扱う企業に就職し、数年間営業職の経験を積んだ。退職後、「安代漆工技術研究センター」へ入所し、2年間漆職人の技術を学び、晴れて一昨年から実家の「丸三漆器」で塗師として従事している。



エリア・コンサルティングの様子

いう。まずはその使い方を考えられないか考えた。そこから生まれたのが「FUDAN」というシリーズである。その名の通り、もっと漆器を普段使いに、日々の生活に寄り添うような器を考案し、販売している。ロゴマークは、兄の真さんがデザインし、毎日何気なく着ている普段着のTシャツのような器、という意味を込めてTシャツが描かれている。秀衡塗の特徴でもある胴張りの豊かな形状を継承し、木製とひと目で分かるよう木目が見えるように拭き漆を重ねた。格調高い伝統的な秀衡塗とは全く違う、気軽な日常使いの器は、より広い世代の人に親しみを持って使ってもらえるような商品だ。

職人としての活動はまだ始まったばかりの青柳さんだが、常に問い続けているテーマにはぶれがない。漆や漆器を知らない人、なじみのない人たちにいかにして興味を持ってもらえるのか、手にとってもらえるのか。そのためには、プロダクト自体に分かりやすさと面白さが必要だ。さらに、国内だけでなくどまらず、日本の漆を海外の人へも広められるようなものを作りたい。そこで、今回完成したプロダクトがオプジェ「chikyu」だ。

万人が共有する「地球」をモチーフに



完成プロダクト「chikyu」

日本の漆を世界の漆へ。漆へ触れるきっかけとなるようなプロダクトを制作したい。青柳さんは、当初、液体を注ぐと器の内側に絵が現れる漆の酒器を構想していたが、思うように絵が出なかったり、素材選びに苦労し行き詰まっていた。そこで迎えたエリア・コンサルティングにて、「よりラグジュアリー感のあるもの」とサポーターメンバーの川又俊明氏から受けたアドバイスをもとに「FUDAN」のコンセプトを生かしつつ、海外の人へ向けたプロダクトとして、技術研究センター「修了時に卒業制作で作った「漆の地球儀」をブラッシュアップすることに転じた。そこから、青柳さんの制作は一気に加速する。

く、オプジェに触れて漆のつややかさを、さらにヒノキの香りも楽しめ、五感で日本を感じてほしいという思いを込めている。オプジェを収納する木箱は桐で作成し、蕎麦屋の出前から着想を得て、岡持ち型にすることで面白さを取り入れた。自身のコンセプトを表現し、世界へと向けたプロダクトは、形を変えて実現した。

昨年秋には、フランスへ赴き「コルマル国際旅行博」の岩手県ブースにて、漆文化の発信のため、塗りの実演を行った青柳さん。漆を世界へと広げる道を、着実に歩み進めている。このプロジェクトを通じて、新しいものを生み出すことの難しさや楽しさを感じながら、期日までに必ず仕上げるという使命感を持って行動することの大切さを学んだ。これからも「分かりやすく、楽しい」をコンセプトに、漆や漆器を知らない人にも親しみやすい商品を開発して、漆業界に貢献していきたい。」と熱意を込めた。



「chikyu」表面部

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



商談会で説明する青柳さん



青柳 匠郎 岩手 / 塗師

岩手県一関市出身・高校まで地元で育ち、人情や商人の町に憧れ大阪の大学に入学。自由で有意義な4年間を過ごす。オフィス、物流関係の消耗品を取り扱う会社に就職。名古屋支店で1年半、東京本社で5年半営業職をした後、実家の家業を継ぐため家族で帰省。漆の塗りや技法について勉強するため「安代漆工技術研究センター」に入所。2年間のカリキュラムを終え、実家の「丸三漆器」に入社、現在に至る。



青柳さんの作業風景